卒業論文作成の手引き

大東文化大学　国際関係学部

Ⅰ．論文とは？

1．卒論とレポートとの違い

卒論はレポートとは異なる。レポートとは書籍や雑誌などを読んで，すでに他人が整理して提供している知識を理解し，要約・整理したものを指している。卒論は，自分自身の知的生産物を含んだもの，情報発信できる内容を含んだものでなければならない。

卒論としてどのような内容を持つものが望ましいのか，いくつかのガイドラインを示してみる。第１は、はっきりした結論，成果が得られなくても，自分の体験，調査に基づくものを高く評価する。事例研究としてまとめるのもよい。自ら理解できた内容を自分の文章として表わすことが大切である。第２は、書物，雑誌などの資料を素材とせざるを得ないテーマの場合，数種類以上の，異なった著者・情報源の資料を元にし，比較考察しながら，自分としての見解を明確にするという取り組み方が望ましい。第３は、立派な成果そのものより，各自が自分の能力に応じて，どの程度自主的な取り組みに努力したかという点を重視する。第4は、卒論作成作業が正規の授業時間分の仕事をすればよい，というような考え方を取っていない。「何時間分の作業をすればよい」という発想ではなく，「自分で何かをまとめ上げる」ということを狙いにしていることを念頭において，自主的に取り組む必要がある。

2．卒論のプロセス

卒論とは、自分自身が選んだテーマについて、出来るだけ多くの資料や文献に基づいて独自の仮説を立て、論理的な構成と豊富な具体例によってそれを論証する試みである。したがって、他人の意見をそのまま繰り返したものであってはならないのと同時に、単なる感想文でもいけない。

こうした問題の設定から検証までのプロセスは、おおむね次の６段階を経る。第１段階は、問題（テーマ）の設定である。例えば、「なぜケーキ屋がブームになったのか？」という問題（テーマ）を設定したとする。そこでは「ケーキ屋とは何か？」という研究する対象を明確にする必要がある。さらに大切なことは、自分はなぜこの問題に取り組むのかという動機を明確にしておくことである。第２段階は、先行研究の検証である。これまで、出版されたケーキ屋に関する本・論文を読んで整理する。ケーキ屋の流行についてどこまでわかっていて、何がわかってないかを整理する。第３段階では、仮説を考えることである。これは結論の予測と深く関連する。例えば、「ケーキ屋のブームは女性の社会進出が原因ではないか」という仮説を立てることが重要である。第４段階は、調査である。調査は仮説を検証するためにある。その際には、調査対象の限定、調

査方法や調査内容などを決定することがある。例えば、「客層やケーキ屋のタイプから客層が女性客中心であるか」、「ケーキ屋ができはじめた時期と女性の就業率のデータとの関連性」を確認してみる。またケーキ屋の経営者に、女性客がメインか、インタビューしてみることも重要である。さらに、日本中のケーキ屋を調べる訳にはいかないので、池袋東口に限定することもあろう。タウンページでケーキ屋を全部チェックし、行ってみる。地図を作製するのも考えられる。第５段階は、分析の段階である。第４段階の調査によって収集した資料から仮説が検証されるかどうかを分析する。そして第６段階は、結論の段階である。すなわち、第１段階から第５段階を経て、得られた分析結果を中心に結論を出すことである。客観的な資料や調査と科学的な分析が重要なのである。

Ⅱ　論文の書き方

卒業論文の具体的な書き方については指導教員の指示に従うこと。以下、参考までに、一般的な書き方の一例を示す。

また、卒業論文の長さは、原則として**２万字以上**とする（英文の場合には 10,000 words 以上）。

1. 論文の構成

論文は、（１）表紙、（２）目次、（３）本文、（４）注、（５）参考文献表などからなる。

（１）表紙

《例》

○○○問題とその変容
－△△と××を中心に－

学籍番号：11151001
氏名：○○○○
指導教員：◇◇◇◇
卒業予定：△△△△年３月

（２）目次 ／（３）本文（論文の構成）

《例》

目次

Ⅰ．はじめに ・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　１．○○○問題とは何か ・・・・・・1
　２．研究の意義 ・・・・・・・・・・・・・・3
　３．研究の視点とデータ ・・・・・・5

Ⅱ．○○○問題の歴史的背景 ・・・・8
　１．○○○問題と△△ ・・・・・・・・8
　２．○○○問題と××　・・・・・・・12

Ⅲ．○○○問題の展開・・・・・・・・・・・15
　１．◇◇◇◇◇ ・・・・・・・・・・・・・15
　２．◇◇◇ ・・・・・・・・・・・・・・・・・17
　３．◇◇◇◇ ・・・・・・・・・・・・・・・20

Ⅳ．○○○問題の変容 ・・・・・・・・・22
　１．◇◇◇◇◇ ・・・・・・・・・・・・・22
　２．◇◇◇◇◇◇◇・・・・・・・・・・・25
　３．◇◇◇◇ ・・・・・・・・・・・・・・・28

Ⅴ．結び ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
　１．結論 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
　２．今後の展望 ・・・・・・・・・・・・・35

注 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・37
参考文献表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・40

※「はじめに」では、なぜこのテーマを選んだのか、それがどのような意味をもつのかを明らかにする。また、そのテーマをどのような視点から研究し、その際どのような資料やデータを利用するかにも言及する。

※「本論」（例では、Ⅱ～Ⅳ章）は、内容に即して、いくつかの章、節（さらには、項）に分け、簡潔なタイトルをつける。

※「結び」は、論文全体のまとめであり、特に「はじめに」で提示した課題と呼応させることに注意すること。
　また、今後の展望や残された課題などについても触れておくとよい。

※「注」は、①何らかの資料や他人の言葉を借りてきた場合、②他人の意見を借りてきた場合、③本文の議論の展開には直接関係ないが、補足的に必要と思われることを読者に知らせたい場合などに用いられる。

※「参考文献表」は、論文中に引用した文献だけでなく、直接引用していないものでも、議論の参考にしたものも含める。詳しくは、後述の「参考文献表の書き方」を参照すること。

２．表記の仕方

《例》

Ⅲ．○○○問題の展開

１．◇◇◇◇◇

○ASEAN（Association of Southeast Asian Nations,
東南アジア諸国連合は、・・・・・・・・・・・・・。
ASEAN が・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・である。
しかし、・・・・・・・・・・・・・・・・。

この点について、○○氏は、「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・だったと思います」と述べている（鈴木，1995：15－17 ページ）。

1990 年度における◇◇◇は 23 億 500 万円ドルにものぼり、その結果、・・・・・・・・・・・・・・・・だと考えられる(注1)。

15

※段落の最初は１文字分あける。

※文章は平明な表現を心がける。原則として当用漢字を用い、「である」調で統一すること。

※引用した文献の著者の姓および出版年、引用ページを明記すること。

※ただし、他人の言葉を引用するときは、原文どおりにすること。

※数字は原則としてアラビア数字を使う。ただし、本文中では、万以上の数字は万、億、兆などを用いる。

※注は該当箇所の右肩に小文字で付け、章末にページを改めて記述する。
あるいは、脚注として各ページの下に記してもよい。

※ページ番号を忘れずに！

※注の例

（注１）世界銀行の 1990 年度年次報告書（World Bank, 1991）によると、・・・・・であるが、
□□氏の研究（□□, 1998）を踏まえると、・・・・・だということに注意すべきである。

⇒（World Bank, 1991）や（□□, 1998）の資料・論文名の詳細は、「参考文献表」にまとめて記述する。

３．その他

（１）原稿用紙の使い方については、演習指導教員の指示に従うこと。

（２）専門用語、固有名詞などの表記の統一に注意すること。

Ⅲ　図表の書き方

図表は、それぞれ通し番号を付し、表題をつける。必ず単位と出所を明記し、必要に応じて注記をつける。

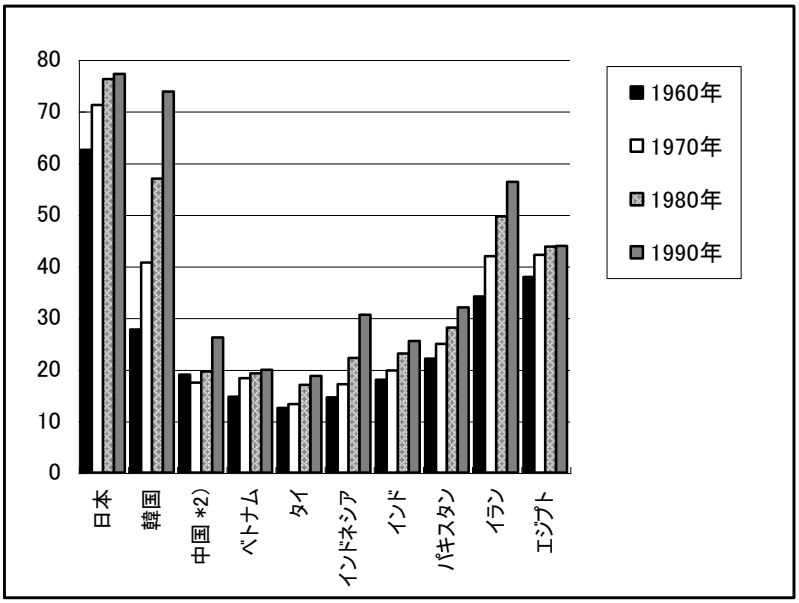
表1　米の主要生産国（モミ量）

（単位：千トン）

	1979～81年平均	1989～91年平均 *2)	1995年	%
中国 *1)	145,529	191,589	187,192	34.0
（台湾）	n.a.	2,258	2,108	0.4
インド	74,557	111,290	122,372	22.2
インドネシア	29,570	44,864	49,860	9.1
バングラデシュ	20,125	26,980	24,659	4.5
ベトナム	11,808	19,281	24,000	4.4
タイ	16,967	19,398	21,130	3.8
ミャンマー	12,637	13,658	20,109	3.7
日本	13,320	12,688	12,625	2.3
ブラジル	8,533	9,318	11,236	2.0
フィリピン	7,747	9,672	11,002	2.0
アメリカ合衆国	6,968	7,106	7,888	1.4
韓国	6,780	7,705	6,519	1.2
パキスタン	4,884	4,862	5,714	1.0
エジプト	2,376	3,098	4,822	0.9
世界計	393,949	517,572	550,193	100.0

（注）1）台湾を含む。
　　2）中国および台湾は、1990年の数値。
　　なお、「n.a.」はデータが入手できなかったことを示す。
（出所）FAO,『FAO生産年鑑』（1994年版および95年版）より作成。

図1　アジア諸国の都市人口比率 *1) の推移（1960～1990年）



（注）1）都市の定義は国によって違いがあるため、各国間の単純な比較はできないことに注意。
　　2）台湾を含み、香港を含まない。
（出所）『世界国勢図会１９９７／９８年版』表２-７（８９－９０ページ）より作成。
　　（原資料は、United Nations, World Urbanization Prospects, 1994 .）

Ⅳ 参考文献表の書き方

１．日本語文献（著者名の「あいうえお順」に並べること）

(1) 単行本の場合： **著編者名『書名－サブタイトル－』(講座・シリーズ名)出版社、出版年。**

《例》 岡田恵美子『イラン人の心』日本放送出版協会、1981 年。
加藤祐三『東アジアの近代』（ビジュアル版世界の歴史 17）講談社、1985 年。

(2) 翻訳書の場合： **原著編者名(翻訳者名)『書名－サブタイトル－』(講座・シリーズ名)出版社、出版年。**

《例》 スティーブン・メネル（北代美和子訳）『食卓の歴史』中央公論社、1989 年。

(3) 論文の場合

・単行本所収論文： **執筆者名「論文名」(編者名『書名』出版社、出版年、頁)。**

《例》 池田明史「イラン・イラク戦争と超大国」（清水学『変貌する中東の政治構造』アジア経済研究所、1985 年、15-46 頁)。

・雑誌論文： **執筆者名「論文名」『雑誌名』巻号，出版年，頁。**

《例》 福島真人「内面と力－ジャワ神秘主義と伝統的政治モデル－」『民族学研究』第 52 巻第 4 号、1988 年、1-25 頁。

(4) 新聞の場合： **『新聞名』年月日、朝夕刊の別**

《例》 『日本経済新聞』2000 年 5 月 20 日夕刊。

(5) 未公刊物（内部資料，学位論文など）の場合： **著者名「資料名／論文名」印刷元、印刷年。**

《例》 篠浦光「開発途上国の農業構造－植民地期におけるその形成過程を中心に－」（研究資料第 3 号）農業総合研究所、1987 年。

２．外国語文献（著者名の「ABC 順」に並べること）

※ 著者名は，原則として姓を先，名を後にし，共著の場合には 2 人目から倒置しない。

(1) 単行本の場合：

著編者名（編者が一人の場合は「ed.」，複数の場合は「eds.」を付ける）**，書名**（手書きの場合は下線を引く。ワープロの場合はイタリック体。以下，書名は同様に）**，出版地：出版社，出版年.**

《例》 Shoshan, B., *Popular Culture in Medieval Cairo*, Cambridge, 1993.
Hirsch, Philip and Carol Warren eds., *The Politics of Environment in Southeast Asia: Resources and Resistance*, London:Routledge, 1998.

(2) 論文の場合

・単行本所収論文： **著者名，“論文名”，(編者名，<u>書名</u>，出版地，出版社，出版年).**

《例》 Frank, Andre Gunder, “The Development of Underdevelopment,” (Robert I. Rhodes, ed., *Imperialism and Underdevelopment*, New York: Monthly Review Press, 1970.)

・雑誌論文： **著者名，“論文名”，<u>雑誌名</u>，巻，号，出版年，頁.**

《例》 Gallgher, John, “Nationalism and the Crisis of Empire, 1919-1922,” *Modern Asian Studies*, vol.15, No.3, 1981, pp.21-36.

・学位論文： **著者名，“論文名”，学位種別，提出先，提出年.**

《例》 Christensen, Scott R., “Coalition and Collective Choice: The Politics of Institutional Change in Thai Agriculture,” Ph.D.dissertation, University of Wisconsin, 1993.

３．インターネット情報の引用

アドレスとサイト名を明記すること。また，アクセスの日時も明記することが望ましい。